たねまきアクア

@KCUA（アクア）とその周辺に広がる
創造活動の現在形

06

京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA（アクア）

ZINE

京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA とは

京都市立芸術大学ギャラリー@KCUAは、2010年春、中京区堀川御池に京都堀川音楽高等学校の新築移転に伴い、その敷地内南側に建てられたギャラリー棟（堀川御池ギャラリー）内に設立された京都市立芸術大学のサテライトギャラリーです。
「@KCUA」は大学の英語表記「Kyoto City University of Arts」の頭文字に場所（サイト）を示す「@」を付けたもので、音読するとラテン語の「アクア＝水」となります。生命を養う水のように、芸術が人々の暮らしに浸透し、創造力豊かな社会に貢献するという本学の理念を表現しています。
当ギャラリー学芸員の企画による特別展のほか、京都市立芸術大学の研究成果発表展ならびに教員・在学生・卒業生による企画展など、年間約15本の展覧会を開催しています。そのほか、国内外で活躍するアーティストを講師に迎えた若手アーティスト対象のワークショップや京都市立芸術大学移転整備プレ事業「still moving」の実施など、展覧会だけにとどまらず、多岐にわたる活動を実施しています。

COVER PHOTOS:
京都市立芸術大学移転整備プレ事業
「still moving documents ── 崇仁絵巻」
京都市立芸術大学のキャンパス移転予定地である京都駅北東部の崇仁地域は、かつて民衆の力によって独自のシステムを持つ銀行の設立、人権運動などによって自ら権利を勝ち取ってきた経緯など、歴史的に重要な事柄を多く有しています。本プロジェクトでは、この地域の「生きた」記憶を、制度や公的な記録から抜け落ちてしまうことのないようにドキュメントとして「演出」し、未来へとつなげるための方法を模索してきました。この街の変化はこれからも続いていきます。その通過点として、プロジェクトメンバーそれぞれが記録した街の様子を、冊子よりももっと流動的で、時間の流れを感じさせる「巻物」としてまとめます。
Photos by Takuya Matsumi（cover, p. 02, back cover）

京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA ZINE

たねまきアクア

06

Contents

4–11 **REPORT @KCUA** ──「ジェン・ボー」

12–16 **REPORT @KCUA** ──「京都賞受賞記念 ジョーン・ジョナス ワークショップ」

17–21 **PREVIEW @KCUA** ──「京芸 transmit program 2019」

22–23 **SCHEDULE @KCUA 2019.4–2020.3**

24–25 **VOICE @KCUA** ── 重本晋平「関係づける視点」

26–31 **STUDIO VISIT @KCUA** ── 今村遼佑、久門剛史「二つ並びのスタジオ」

たねまきアクア
たねまきアクアは、@KCUA とその周辺に広がる創造活動の現在形、
クリエーションが立ち上がろうとしているシーンを紹介していく広報誌です。
（不定期発行、無料）

Zheng Bo

TEXT: Mizuho Fujita

京都市立芸術大学ギャラリー@KCUAでは毎年、国際的に活躍する海外作家の創造と実践に触れる機会として、展覧会やワークショップ、レクチャーなどを実施しています。2019年度は、中国のソーシャリー・エンゲージド・アートにおいて最も注目を集めている気鋭のアーティスト、ジェン・ボーを招聘し、6月から7月にかけて個展を開催します。2013年から雑草などの植物を用い、史実や社会現象などを考察する作品を手がけるジェンは、数多くの国際展に参加するなど精力的に活動しています。映像作品《Pteridophilia》シリーズの最新作が発表された第11回台北ビエンナーレの開幕に合わせて台湾で、また2019年1月には京都にジェンを迎え、このプロジェクトに向けての準備・調査を行いました。

Zheng Bo, *Pteridophilia 1*, 2016.
Video（4K, color, sound), 17 min.

昨年の11月、ジェン・ボーの案内のもと、《Pteridophilia》*のシリーズの撮影場所である台北郊外の森を訪れた。年間を通じて湿度と温度の高い台湾の環境のもと、多くのシダ植物が伸び伸びと生い茂っている。この日は朝から小雨が降っていた。静かなこの森の中では、傘に落ちる雨音がやたらに大きく感じられる。撮影に使ったシダが新しい葉を伸ばしているのを一つ一つ確認しては安堵しているジェンの背中を追いながら、森の奥へと進む。

「このシダの森では、一年を通して風景はそれほど変わらない。作品ごとに季節を変えて撮影すると、音だけが違って聞こえることになるんだ」とジェンは言った。私はしばらく傘をさすのを止めて、耳を澄ましながらあたりを見渡した。森に降るやわらかな雨が奏でる響きは心地よく、葉から水滴が滴り落ちる様はとても美しかった。

***《Pteridophilia》**（2016–）
2016 年の台北でのアーティスト・イン・レジデンスでのリサーチを契機として始まった映像作品のシリーズ。“ pterido- ”は「シダ」を意味する接頭辞、“ -philia ”は「あるものに対する愛情又は嗜好性」を意味する接尾辞で、いずれもギリシア語由来。台湾においてシダは、原住民に古くから大切にされるなど歴史的にも重要な植物である。台湾が日本の植民地であった時代に移住してきた日本人の画家たちが、台湾の美しい花々に魅せられたこと、とりわけ第２次世界大戦の終戦間際に日本軍が、また終戦後には中国本土からやってきた国民党が、食用シダを救荒植物として用いたことに着想を得たジェンは、人間と植物との共存関係について考察する《Pteridophilia》の制作に着手した。権力、統制と服従などが政治、性愛、そして生態学においてどのように現れるかを探ってきたジェンは、胞子が発芽して形成される前葉体で受精することによって増えるシダ植物を「クィア」な植物と定義し、これらと「クィア」な人々との親密な関係性を描くことで「エコ・クィア」の可能性を探求している。

Zheng Bo, *Pteridophilia 2*, 2018.
Video（4K, color, sound), 20 min.

1
レクチャー「ポスト社会主義の中国のソーシャリー・エンゲージド・アート」（京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA）

2
「まちくさ博士」重本晋平とのまち歩き（下鴨神社糺の森、出町柳近辺、京都大学吉田寮など）

3
京都市立芸術大学沓掛キャンパス訪問

ジェンが京都にやってきたのは、それから約2ヶ月後の1月末のことだ。ちょうど、昼下がりから大粒の雪が降った日で、いつも見慣れた景色が、雪によって新たな表情を見せていた。思えばそれはまるで、ジェンがもうすぐここにやって来ることを示しているかのようだった。街の中に潜む小さな物事や、ささやかな変化を、彼は決して見逃さない。ジェンと一緒に歩くことで、良く知っているはずだった場所にも、まだ知らないものが多くあることに気づかされる。そんな数日間の始まりだった。

今回の京都滞在中に、必ず彼に見てほしい場所があった。それは、京都市立芸術大学の移転予定地である崇仁地域である。これまで特に明言はしなかったが、私にとって非常に重要であるこの場所で、彼となら何か素敵なことが実現可能なのではないか、との密かな期待をもっていたからだ。ゆえに、私は半ば意図的に、帰国の1日前に崇仁地域を訪問する予定を組んでいた。滞在中に訪れたどの場所よりも、ここに興味を

Zheng Bo

持ってくれたら、という願いを込めて。

崇仁の街を巡りながら、ジェンは雑草の駆除が行われた形跡のない場所が至る所にあることに驚いていた。そして私はお気に入りの「雑草の庭」の数々に彼を誘った。たくさんの空き地、広い小学校の校舎……ジェンは、その日一緒に歩いていた芸術資源研究センターの佐藤知久准教授と私に、この状況がいかに豊かなものであるかを説いた。これまで私は、京都芸大の移転計画以前から、そしてその計画が進むにつれて一層、崇仁の街にあったものがどんどん失われていくことや、キャンパスがここに来ることによって変化していくことばかりに気を取られていて、「豊かさ」という視点ではこの場所を見ていなかったかもしれない。「非常に特殊で、恵まれている」とジェンは重ねた。

その日の午後、崇仁地域の歴史資料館である柳原銀行記念資料館を訪れ、山内政夫事務局長にお話を聞いた。ジェンは非常に熱

4
シダ植物の蒐集家でもある画家の鶴田憲次（@KCUA 長）、植物学者の光田重幸との相楽郡和束町付近の散策

5
東九条で植物に関連したアートプロジェクトを展開中の山本麻紀子のアトリエ訪問

6
京都市立芸術大学新キャンパス設計チームの一員、建築家の大西麻貴と

心に、多くの質問をした。それから一緒に外へ出て、高瀬川周辺を歩きながら二人は話を続けた。この川を、月に一度掃除をしていること。その掃除の際、雑草はそのままにしてゴミだけを取り除いて生態環境を整え、やがて20種類以上の生き物が川に集まってくるのを目指していること。そして二人は、自然と人間が共存する豊かなまちづくりがいかに大切かを語り合った。

ジェンが京都にいたのはほんの数日だったが、あらゆるものに向ける、彼の優しくも真摯で鋭いまなざしを間近に感じたこの経験は、彼とのプロジェクトそのものに限らず、今後の自分自身の意識をも何かしら変化させていくような気がしている。この京都滞在の初めに@KCUAで行った、中国のソーシャリー・エンゲージド・アートに関するレクチャーでは、会場から「なぜ政治的な活動を「アート」として行わねばならないのか、それを「アート」と呼ぶことで、自ら制限を加えているのではないか」との質問があった。もちろん、現在の中国の状況では、「アート」という曖昧な枠組みでしか許されない活動も多々あるだろう。しかし、アーティストが物事を見つめる視点、触れる手つきには、いわゆる「正攻法」ではないが故の不思議な力が秘められていると私は常々思っている。「クィア」という言葉を、性的マイノリティを示す狭義としてではなく、定義を拒む流動的なものとして解釈するのであれば、ジェンが《Pteridophilia》において探求する「エコ・クィア」の可能性とはつまり、アートそのものの可能性にもつながるものだ。ジェンとのプロジェクトはまだ過程の段階ではあるが、彼と並走することによって現れる未知なる何かを、私は心から待ち望んでいる。

ジェン・ボー　ZHENG Bo／鄭波

1974年北京生まれ。香港在住。中国のソーシャリー・エンゲージド・アートにおいて最も注目を集めている気鋭のアーティストの一人。社会的に周縁化された集団や雑草などの植物に注目し、政治的な史実、アーカイブなどの過去の事物の調査にそれらを結びつけ、未来について考察する作品で知られる。2012 年にアメリカ・ロチェスター大学にて博士号取得。2013 年より香港城市大学のクリエーティブ・メディア学部助教授。いわゆるアート・シーンとは一定の距離を保ちつつも、近年はアジア、ヨーロッパ、アメリカでの個展開催や数々の国際展に参加するなど精力的に活動し、非常に高い評価を得ている。

EXHIBITION

ジェン・ボー個展（タイトル未定）

2019年6月1日(土)－7月15日(月・祝)

会場：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA

そのほか、崇仁地域での継続的なプロジェクトを予定。

京都賞受賞記念

ジョーン・ジョナス ワークショップ

Radicalism of Performance and Media Art
―Joan Jonas and the Succession―

Teppei Kaneuji + contact Gonzo

TEXT: Mari Ikezawa

第34回 京都賞記念ワークショップ［思想・芸術部門］
パフォーマンスとメディア・アートのラディカリズム
―ジョーン・ジョナスとその変遷あるいは継承―
2018年11月14日（水）19:00
会場：ロームシアター京都 ノースホール
企画：橋本裕介（ロームシアター京都 プログラムディレクター）、
　　藤田瑞穂（京都市立芸術大学ギャラリー＠KCUA 学芸員）
主催：公益財団法人 稲盛財団
企画・制作：ロームシアター京都
後援：京都府、京都市、NHK

リサーチプログラム
- 受賞者基調講演
  ジョーン・ジョナス
- 受賞者ビデオ作品上映（抜粋）
  Organic Honey's Vertical Roll（1972）
  Lines in the Sand（2002）
- 関西の若手アーティストによる作品上映・パフォーマンス
  笹岡由梨子（美術家）
  金氏徹平（彫刻家）＋contact Gonzo（パフォーマンス集団）
- 受賞者と関西の若手アーティストとの対話
  ジョーン・ジョナス、笹岡由梨子、金氏徹平、contact Gonzo

第34回 京都賞記念ワークショップ
「パフォーマンスとメディア・アートのラディカリズム
―ジョーン・ジョナスとその変遷あるいは継承―」
金氏徹平＋contact Gonzoによるパフォーマンス
（会場：ロームシアター京都 ノースホール）

Photo courtesy of the Inamori Foundation / © Yoshikazu Inoue

ジョーン・ジョナスが第34回京都賞を受賞した。それに関連して、2018年11月、ロームシアター京都においてワークショップ「パフォーマンスとメディア・アートのラディカリズム ―ジョーン・ジョナスとその変遷あるいは継承―」が開催された。ここでは、その多様なプログラムの中から、金氏徹平とcontact Gonzoによるパフォーマンスについてレポートする。

パフォーマンスの始まり、contact Gonzoの3人、金氏徹平と20人近くの学生らが、ステージの周りにバラバラと登場する。そして中央の空いた空間をつかって、contact Gonzoによるパフォーマンスが始まる。身体が衝突する音、漏れる声、間合い、動きなどを観客は追っていく。
徐々に金氏と学生らがステージ全体へと広がっていく。彼らは、ビデオカメラやプロジェクター、鏡などの小道具を各々持っている。中には、激しく動き回るcontact Gonzoと同じステージにいて大丈夫なのだろうかと心配するほど、差異を感じさせる者もおり、contact Gonzoの「接触（コンタクト）」に対し、身体の所在を感じさせないスローな動きだけがステージに漂い出す。
いつの間にか金氏らがつくりあげた空間を、contact Gonzoの方が逆に縫うような形で、接触せずに動いていく。その様子を、金氏らの誰かが手にしているビデオカメラでリアルタイムに撮り、その映像をまた別の誰かがそのままどこかに投影する。天井から垂れ下がるスクリーンや壁に、複数のアングルが次々映し出される。ステージで繰り広げられているそれら全てが、捉えられ記録され公開されているようでいて、観客である私たちはその全体を掴みきれない。なぜなら、全体を見ているはずの観客席からの視線は、そこに行き着くまでに分散される。カメラやプロジェクター、鏡、ステージ上の人間の複数の視点が交錯・変化していくことで、観客の視線は全く別の場所に遭遇したりする。

会場には激しいライブ感やカオスが生じているというわけではなく、「こぽっ」とした小さな空間がステージ上のところどころに時折生まれているようだった。コップの水にストローで息を吹き込み、ぶくぶくさせるような。ただ緩やかに存在することで、どこかに「空き」や「穴」を生み出す。

本プログラムの基調講演において、ジョナスは1960–70年代に自身が活動した場所や、その「小さな世界」において出会った様々なアーティスト、彼らが行っていた新しい「何か」について紹介した。企画者の一人である橋本は、新たなものを生み出す「空き地」のない現代日本の閉塞感について語っていた。そのような状況を踏まえた金氏とcontact Gonzoが、ジョナスへのオマージュという設定のもと、自分たちの現状を投影したパフォーマンスだった。そこに、生み出された「空き地」や「穴」を垣間見たような気がしなかったわけでもなかった。

パフォーマンスのラスト、ステージは暗くなり、奥の明るい出口（入口？）へとパフォーマーたちは去っていった。

池澤茉莉　Mari Ikezawa
熊本市現代美術館 学芸員
京都国立近代美術館研究補佐員、「PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭 2015」アシスタントキュレーターなどを経て現職。企画・担当した主な展覧会に、GIII vol. 118「風を待たずに――村上慧、牛嶋均、坂口恭平の実践」（熊本市現代美術館、2017）、「渚・瞼・カーテン チェルフィッチュの〈映像演劇〉」（熊本市現代美術館、2018）。

パフォーマンスとニューメディアを融合させた新しい芸術表現の先駆者であり、50年にわたり現代美術の最先端を走り続ける美術家、ジョーン・ジョナス（第34回（2018）京都賞思想・芸術部門受賞者）。2019年12月、京都にて、その長年の業績を包括的に紹介する国内最大規模のパフォーマンス公演・個展の開催が決定！

Portrait of
Joan Jonas,
New York, 2012.
Photo by
Brigitte Lacombe

ジョーン・ジョナス　Joan Jonas
1936年ニューヨーク生まれ。ニューヨーク在住。映像を用いたパフォーマンス・アートの先駆的存在かつその歴史における最も重要なアーティストのひとりとして知られる。美術史と彫刻を学んだ後、60年代後半から70年代にかけて、鏡や衣装、小道具、ドローイング、映像などを組み合わせた実験的なパフォーマンスやインスタレーションを屋内外で発表。幅広いイメージの源泉から、さまざまな表現手段を用いて、独自の視覚言語を織り上げている。

Joan Jonas, *Reanimation*, 2010/2012/2013,
Gavin Brown's enterprise, New York, NY, 2017.
Photo by Thomas Müller

Joan Jonas, *Reanimation*, 2012, performance at Hangar
Bicocca, Milan, Italy, Light Time Tales, 2014.
Photo by Moira Ricci

EXHIBITION

ジョーン・ジョナス京都賞受賞記念
展覧会（タイトル未定）
2019年12月14日（土）–
2020年2月2日（日）
会場：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
主催：公益財団法人稲盛財団、京都市立芸術大学
企画：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
企画協力：ロームシアター京都

PERFORMANCE

ジョーン・ジョナス京都賞受賞記念
パフォーマンス『Reanimation』
2019年12月12日（木）
会場：ロームシアター京都 サウスホール
主催：公益財団法人稲盛財団
共催：ロームシアター京都（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）
企画・制作：ロームシアター京都
企画協力：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA

PREVIEW @KCUA

京芸

transmit program 2019

「京芸 transmit program」は京都市立芸術大学卒業・大学院修了3年以内の若手作家の中から、いま、@KCUAが一番注目するアーティストを紹介するプロジェクトです。アーティストの活動場所として日本でも1、2を争う都市京都における、期待の新星を紹介するシリーズとして、毎年春に開催しています。
2019年度は、黒川岳（彫刻）、寺岡波瑠（環境デザイン）、本山ゆかり（油画）、山本真実江（陶磁器）が出展します。
この4人の作家は、同世代であることはもちろん、彫刻、建築、絵画、陶という物質的なメディアに時間的な要素を内包しつつ展開していく作品を手がけるという共通点も持っています。本展において、一つの空間に共存しながらそれぞれに立ち上がってくる、個々の清新な表現にご注目ください。

ギャラリー崇仁
元崇仁小学校の職員室をリノベーションし、2018年に開設。本展出展作家である寺岡波瑠が、本学大学院美術研究科在学中に設計した。ギャラリーの室内はガラス窓のついた仕切り壁によって二つの空間に仕切られている。壁の向こう側は、設備や天井や屋外に通じるドア、窓のガラスなどが撤去されており、雨風や木の葉などが吹き込み、徐々に外の空間に溶け込んでいくことが目論まれている。現在は、京都市立芸術大学移転整備プレ事業「教室のフィロソフィー」のシリーズを中心に、本学出身の若手作家の作品展示を行っている。

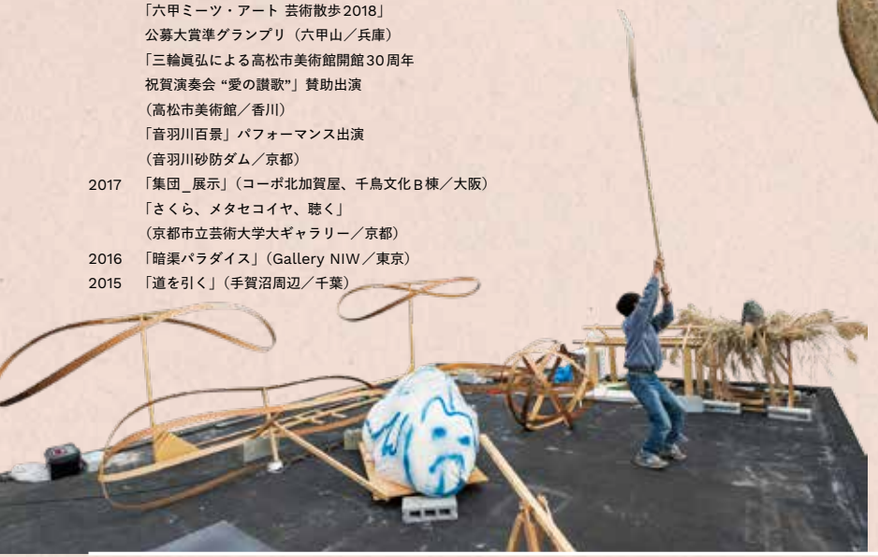
黒川岳
Gaku Kurokawa

1994　島根県生まれ
2016　東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科 卒業
2018　京都市立芸術大学大学院美術研究科
　　修士課程彫刻専攻 修了

——

主な展覧会、パフォーマンス、受賞歴など
2018　「奈良・町家の芸術祭 はならぁと 2018」
　　（吉野町曽爾村／奈良）
　　「六甲ミーツ・アート 芸術散歩2018」
　　公募大賞準グランプリ（六甲山／兵庫）
　　「三輪眞弘による高松市美術館開館30周年
　　祝賀演奏会 “愛の讃歌”」賛助出演
　　（高松市美術館／香川）
　　「音羽川百景」パフォーマンス出演
　　（音羽川砂防ダム／京都）
2017　「集団_展示」（コーポ北加賀屋、千鳥文化B棟／大阪）
　　「さくら、メタセコイヤ、聴く」
　　（京都市立芸術大学大ギャラリー／京都）
2016　「暗渠パラダイス」（Gallery NIW／東京）
2015　「道を引く」（手賀沼周辺／千葉）

《石の音を聞く》



《クロカワアニマルキングダム》
撮影：守屋友樹

《不条理建築（死者の建築）》

寺岡波瑠
Haru Teraoka

1993　滋賀県生まれ
2016　名城大学理工学部建築学科 卒業
2018　京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程
　　デザイン専攻環境デザイン 修了

——

主な展覧会、コンペ受賞・入選歴など
2018　「第7回 FEI PRINT AWARD 入選作品展」
　　（FEI ART MUSEUM YOKOHAMA／神奈川）
　　「第49回 毎日・DAS学生デザイン賞 入選作品展」
　　金の卵賞 グラフィック部門 部門賞
　　（大阪デザイン振興プラザ／大阪）
　　「第9回 ハーフェレ学生デザイン
　　コンペティション2017受賞作品展」
　　（Future Design Gallery Uluru／神奈川）
2017　「第6回 E&G DESIGN 学生デザイン大賞」
　　アイディア賞（ポートメッセなごや3号館／愛知）
　　「第8回 ハーフェレ学生デザイン
　　コンペティション2016 受賞作品展」
　　（ハウズ・ジャパン オフィス／東京）
2016　「第21回 福岡デザインレビュー2016」
　　クリティーク賞（審査員長賞）
　　（福岡大学ヘリオスホール／福岡）
　　「せんだいデザインリーグ2016」
　　（せんだいメディアテーク／宮城）
2015　「第4回 E&G DESIGN 学生デザイン大賞」
　　アイディア賞
　　（ポートメッセなごや3号館／愛知）

《画用紙（果物かご）》
撮影：澤田華

1992　愛知県生まれ
2015　愛知県立芸術大学美術学部油画専攻 卒業
2017　京都市立芸術大学大学院美術研究科
修士課程絵画専攻油画 修了

——

主な展覧会、受賞歴など
2018　「paint( )ings」
（Yutaka Kikutake Gallery／東京）
個展「東京・占い・ジャーニー」
（VOLVOスタジオ青山／東京）
2017　「この現実のむこうに—— Here and beyond」
（国際芸術センター青森／青森）
「裏声で歌へ」（小山市立車屋美術館／栃木）
「ART AWORD TOKYO MARUNOUCHI 2017」
後藤繁雄賞（審査員賞）（行幸地下ギャラリー／東京）
2016　「奈良・町家の芸術祭 はならぁと こあ「人の集い」」
（高取土佐街並み／奈良）
「絵画検討会2016」（TURNER GALLERY／東京）
「3331 Art fair 2016」（3331アーツ千代田／東京）
「fabric, light and dirty」（ARTZONE／京都）

本山ゆかり
Yukari Motoyama

山本真実江
Mamie Yamamoto

《Sleeping forest》

1992　京都府生まれ
2015　京都市立芸術大学美術学部工芸科陶磁器専攻 卒業
2016　École nationale supérieure des
Arts Décoratifs Image imprimée 交換留学
2017　京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程工芸専攻
陶磁器分野 修了

——

主な展覧会、受賞歴など
2019　個展「Drawing my daily」（京都陶磁器会館／京都）
2018　「出町マルクト」（旧三井家下鴨別邸／京都）
「アジア現代陶芸交流展」（弘益大学／ソウル）
「お菓子のうつわ展」（喫茶ストーブ／大阪）
「京都花鳥館賞奨学金 2017」優秀賞（京都花鳥館／京都）
2017　個展「ものがたりの断片」（galerie 16／京都）
2015　「アジア現代陶芸交流展」（中国美術学院美術館／杭州）
「プロセスのまわり道」（大枝土蔵／京都）

SCHEDULE @KCUA（アクア）［2019.04–2020.03］

4月 APR. 5月 MAY 6月 JUN. 7月 JUL. 8月 AUG. 9月 SEP. 10月 OCT. 11月 NOV. 12月 DEC. 1月 JAN. 2月 FEB. 3月 MAR.

4/13（土）– 5/19（日）

京芸 transmit program 2019

京都市立芸術大学卒業・大学院修了 3 年以内の若手作家の中から、いま、@KCUA が一番注目するアーティストを紹介するプロジェクト。
第 3 弾となる本年は、黒川岳（彫刻）、寺岡波留（環境デザイン）、本山ゆかり（油画）、山本真実江（陶磁器）の 4 名を選出。

最新情報は @KCUA ウェブサイトにてご確認ください

6/1（土）– 7/15（月・祝）

ジェン・ボー 個展（タイトル未定）

中国のソーシャリー・エンゲージド・アートにおいて最も注目を集めている気鋭のアーティストの一人で、雑草などの植物に注目し、政治的な史実、アーカイブなどの過去の事物の調査にそれらを結びつけ、未来について考察する作品で知られるジェン・ボー（鄭波／ 1974 年北京生まれ、香港在住）を招聘。

Zheng Bo, *A Chinese Communist Garden in Paris (Proposal I)*, 2018.
Model, 50 × 50 × 10 cm

Zheng Bo, *After Science Garden*, 2018

7/27（土）– 8/18（日）

サンドラ・ビニオン「蒸化（ディスティレ）」

（参考）2018 年度収蔵品活用展
Photo by Yuichiro Tamura

8/31（土）– 9/16（月・祝）

吉岡俊直「複眼と対称のノード」

8/31（土）– 9/16（月・祝）

ぼくらとみんなは生きている 5 ～持続可能な愛のステージ～

出展作家：大川原暢人、川又健士、迫 竜樹、鷲尾 怜

9/28（土）– 11/3（日）

京都市立芸術大学 芸術資料館収蔵品活用展（タイトル未定）

芸術大学での教育・研究における「資料」となるあらゆるもの・こと、および書籍をめぐる場（図書館）についての展示企画を計画中。期間中のニュイ・ブランシュ KYOTO では当日限定のイベントを実施。

11/9（土）– 11/24（日）

京都市立芸術大学 美術学部 同窓会展

11/9（土）– 11/24（日）

岡本秀「マンガ」（仮）

11/28（木）– 12/8（日）

京都市立芸術大学 第 30 回 留学生展

Joan Jonas, *Reanimation*, 2010/2012/2013,
Gavin Brown's enterprise, New York, NY, 2017.
Photo by Thomas Müller

12/14（土）– 2020/2/2（日）

ジョーン・ジョナス 個展（タイトル未定）

パフォーマンスとニューメディアを融合させた新しい芸術表現の先駆者であり、50 年にわたり現代美術の最先端を走り続ける美術家、ジョーン・ジョナス（第 34 回（2018）京都賞思想・芸術部門受賞者）の長年の業績を包括的に紹介する。

2/15（土）– 3/1（日）

横田学（本学美術学部教授）退任記念展

2/15（土）– 3/1（日）

森山佐紀・山西杏奈「朝と夜、森にて」

キュレーション：天牛美矢子

3/7（土）– 3/22（日）

浅野均・大野俊明・中ハシ克シゲ・三橋遵（本学美術学部教授）退任記念展

VOICE @KCUA

vol. 6

関係づける視点

重本晋平

人は目に見えるものを自身の育ってきた環境や見てきたもの、体験と重ね合わせる。遠く離れた旅先の地で見た景色に、なぜか懐かしさを覚えたりするのは、自分の生まれ育った故郷と重なるものがあるのかもしれない。

臨床心理学を専門とする河合隼雄は著書の中で《内的体験を他人に伝えるには「物語る」ことが必要。物語は「関係づける」作用を持っている》と述べている。例えば自分の過去の体験を物語ることで、聞き手と自分、過去と現在、さらには自分とこの世界を関係づけているのかもしれない。

ここに「まちくさ」という視点がある。それは、まちの隙間を縫うようにして生える植物とその周辺環境（道路の路肩や電柱など）を写真に切り取り、そこへ独自の発想で「名付け」や「物語」を創作することで、見慣れてしまった景色を自分なりの想像力で塗り替えていく視点だ。私はまちくさに名付ける時「関係づけ」の作用が大きく働いているように感じている。

あるワークショップで小さなクローバーの葉に「つけものクローバー」という命名をした女の子がいた。なぜその名前にしたのかと聞くと、たまたま見つけたクローバーの色が、前日にお母さんが家で漬けていた漬物と似ていたことから〈つけもの〉と〈クローバー〉がぴったり結びついたという。「つけものクローバー」もう一度声に出してみると、その優しい響きに親子のほっこりとした日常を垣間見たようで嬉しくなった。さらに、女の子に真新しい名前を与えられたクローバーに対して懐かしい友人にでも再会した時のような親近感を覚えたのだ。

この女の子は、自分が五感を通して体験したことと目前に広がる光景を関係づけ、自らの名付けによってこの世界に新たな価値を見い出した。記憶の奥に蓄積された言語化できない「想い」が、ふとしたきっかけで意外なものと直感的に結びつくこともある。その化学反応によって産み落とされた言葉は、遥か昔からそこにあったかのような圧倒的な存在感とユーモアの力を持ち、現実と空想（こっちとあっち）の世界を横断する通路のような役割を果たしている。

子どもたちを観察していると、突拍子もないような発言をしたり行動をして大人たちを驚かせる時がある。それはあまりに突発的で表面的には理解しがたい言動かもしれない。ただ、大人には到底測り知れないように思える子どもたちの独創的な発想の一端は、実は身近な日常と密接に関係づいてるのかもしれないのだ。

重本晋平　Shimpei Shigemoto

まちくさ博士／アーティスト

1985 年京都生まれ。京都精華大学芸術学部デザイン学科卒業。
2007 年に考案した「まちくさ」という視点を軸に、路上体験プログラム「まちくさワークショップ」を企画・主宰する。各地の小学校や施設など訪れた数は 100 以上、参加者は 1600 人を超える。2018 年に京都北部の綾部市へ移り住み、農ある生活を試みながら新たな創作の種を蒔く日々を過ごしている。

今村遼佑、久門剛史｜二つ並びのスタジオ

INTERVIEW:
編集部

@KCUAが様々なアーティストのスタジオを訪問し、作品とそれが生まれる場所との関係にせまるシリーズ「STUDIO VISIT @KCUA」。今回訪れたのは、彫刻専攻を卒業したのち、国内外のプロジェクトに多数参加している今村遼佑さんと久門剛史さんの仕事場です。それぞれが独立したスタジオでありながら、隣同士に建つ一風変わったスタジオを訪問しました。

スタジオの条件と二人の距離

久門：僕はまず無条件に広く自由度の高い場所が欲しかったんです。屋外で気分転換もできて、作業できるような。今はスマホなど手の中にあるデバイスをはじめ、あらゆるものから常に大量の情報が入ってくるので、そういったものと距離を取りたかった。情報が必要な時は、自分から外の都市や街に出掛ければいいので、それ以外は穏やかにしていられる方がいいと思っていました。

また、例えばアクセスの良い市内のアトリエであれば、何かの機会にあわせてキュレーターにスタジオビジットに来てもらいやすいかもしれない。けれど、わざわざ来てもらえる作家になりたい、そうやってわざわざ来てくれる人と意味のある仕事をしたい、とチェンマイの山奥に住むアピチャッポンさんの家を訪問したときに感銘を受けて、そう思うようになりました。
でも、実はここは京都駅から電車1本で来れるので意外にアクセスは良かったりするんですけど。

今村：僕は2017年８月からポーラ美術振興財団の助成をもらって1年間ポーランドに滞在していました。残り滞在わずかになった頃から、帰国した後はこれまでより大きなスタジオを探したい、と考え始めていたところ、ちょうどタイミング良く久門くんから「一緒にスタジオを探さないか」と連絡があって。

ワルシャワにいる時から、日本に戻ったら中古でもいいから車を買って、スタジオに通おうと考えていました。行動範囲を広くしたかったし、都市部を離れると自由に使える場所も増えるので、そもそもスタジオが街中にあるメリットをあまり感じていませんでした。これまでも僕は単独スタジオでやってきていたのですが、久門くんから声をかけられた時、広い空間が手に入るのであれば、今のタイミングでシェアするのも面白いかなと。
この場所を決めるまではかなり粘って様々な場所を見に行ったんです。僕たちが住んでいる長岡京市や向日市から車で1時間以内の場所を候補にしていたので、南は京田辺市まで、東は大津市まで。最後にようやく条件と環境が揃ったのがここです。最終的に２棟が並んだ理想的なかたちの独立スタジオを見つけることができ、本当にラッキーでしたね。

久門：僕たちは、予備校も大学も専攻も同じで20年近い付き合いなんです。互いにキャリアを積み、二人とも独立したスタジオを強く望んでいたけれど、程よくそれぞれ大人になり、なんとなく今ならある部分でシェアがあると楽しいかも、と思えました。「この壁どうやって建てたん？」とかは聞くけど、作品の内容とかについてはお互いほとんど干渉し合いません。

場所はフィジカルに作品に影響する

今村：僕の場合出来上がる作品がそれほど大きくないので、大きなスペースは必要ないのではと言われることもあるのですが、ここなら平面、電子工作、立体など様々な作業を同時並行で進めていくことができます。以前は一つを完了させたら片付けてから次を開始させていたので単純に効率が悪かったと思います。

1年間のポーランド滞在からの帰国に伴い仕事や住居が変わるなど生活面でも多くの変化があったので、自分の中に感じる変化は、スタジオだけが理由ではないかもしれません。僕は卒業以降古いアパートをスタジオにしていて、ほとんどの作品を畳の上で作っていたのですが、これからは作り方が変わるかもしれません。些細なことですが、2mを超える木材を転がして組み立てるという作業をここで久しぶりにやったように思います。ここに引っ越してきたから何か新しいことを始めるというわけではないですが、最初は冗談で言っていた、大理石を使った石彫や大きめの絵を描きたいなと考え始めています。

久門：僕が感じる最大の変化は、実際に展示する場所のスケール感に近いサイズで簡単な展示のシミュレーションが可能ということ。それと、ぼーっとできる時間が増えたこと。

僕の以前の住宅街にあった８畳くらいのスタジオでは不可能でした。
今村もそうかもしれませんが、狭いスペースで作って大きな場所に持って行って見せるということをしばらく続けてきましたが、狭い場所でやれることはやりきった感覚があったので、今は次のチャレンジをしたいと思っています。

日本ではない場所で作ることを考える

今村：僕が1年間ポーランドに行きたいと思った理由は、人生経験を濃くするために日本以外の場所に生活拠点を置いてみたいと考えていたから。なので、最初から作れる環境はなくてもいい、必ず作品を作らないといけない

わけではないと思っていました。しかし、ポーランドで所属していたミロスワフ・バウカのゼミでパフォーマンスやプロジェクト型の作品に参加することがあり、これまでに自分が関わってこなかったこれらのジャンルに触れる良い経験になりました。このことから結果的に、自分を映像の中に登場させた作品を作るという、これまでにやったことのない新しいチャレンジにもつながりました。

面白いことに、外国で外国語を喋って生活していると、自分という人格をとても客観的に感じ始めます。そのせいか、映像の中に自分を登場させることに何のためらいも持たなかった。自分という人間に対して、距離をとって接することができたことが面白かったですね。今は長期で海外に行くことは考えていません。短期レジデンスで行く機会があれば行きたいですね。

久門：7月から短期レジデンスで3ヶ月ベルリンに行きますが、僕も今は長期で滞在しに行くことは想像できません。僕は海外に行くとどうしても作るものや買うものが限定される感覚になるのが今はフィットしません。どこでも買える素材、作りやすいもの、運びやすいものを起点に考えるのも嫌だし、旅ばかりになりたくない。

亀岡の自然とマイペースに付き合いながら

久門：ここは元農機具倉庫だったので、最初は埃と砂の掃除から始め、徐々にDIYで手を入れてきました。僕の棟は窓が少なかったので、壁の一部を透明波板に張り替えたり、部屋の一面は白壁にして、内部に小屋を建てました。そうこうしているうちに展示の予定や目先のタスクに追われるようになり、改装はストップしていますが、たまに気分転換に棚やテーブルを作ったりしています。朝来て、掃き掃除、植物の水やりや剪定、メールチェックをして、制作。日中は電気をつけず、夕方暗くなったら帰る、というのが基本のルーティーンになっています。

今村：僕も借り始めたのは久門くんと同じ時期なのですが、直近に展示があったせいで改装している時間が全くなく、季節も変わった頃にやっと白壁を建て始め、シャッター外に扉を作ったりして今ようやく使えるようになってきました。まだ配置も仮なのですが、これから必要に応じて棚や物置のようなものを作りたいと思っています。週4日は別の場所で働いているので、週2、3日来ています。実はこのスタジオの雑草の勢いがものすごくて、窓から見える程なのですが、意外にもこの殺風景なスタジオにちょうど良い感じになってきています。僕の植物ももっと増やしたいですね。

今村遼佑　Ryosuke Imamura

1982年京都生まれ。光、音、匂いなど環境に対する人の知覚を元に、その関係性を考察し、インスタレーション、映像、立体など様々な形にて作品を展開している。主な展覧会に、「雪は積もるか、消えるか」（個展、アートラボあいち、愛知、2018年）、「オープンシアター『KAAT突然ミュージアム2016』」（神奈川芸術劇場、神奈川、2016年）、「アート・スコープ 2012–2014」（原美術館、東京、2014年）、「ヨコハマトリエンナーレ2011」（横浜美術館、神奈川、2011年）など。ワルシャワ（ポーランド）滞在（ポーラ美術振興財団助成、2016年）、ベルリン滞在（メルセデス・ベンツ アート・スコープ、2013年）、ロンドン滞在（Camden Arts Centre、2015年）など海外滞在も多い。

久門剛史　Tsuyoshi Hisakado

1981年京都生まれ。身の回りの様々な現象や歴史的事象を調査し、それらを人工的に作り出す音や光、風などを用いて、劇場的空間に再現するインスタレーションや立体作品などを発表している。近年の主な展覧会に、個展「トンネル」（オオタファインアーツ、2018年）、個展「MoCA Pavilion Special Project Tsuyoshi Hisakado」（上海当代芸術館、2016年）、「あいちトリエンナーレ2016」など。2016年世界各国で上演されたチェルフィッチュ『部屋に流れる時間の旅』の舞台美術を担当。在学中にはロイヤル・カレッジ・オブ・アーツ（ロンドン）へ交換留学したほか、ベルリンにも滞在した（メルセデス・ベンツ アート・スコープ、2018年）。2019年5月よりアビチャッポン・ウィーラセタクンとの共同制作《Synchronicity》が「第58回ヴェネツィア・ビエンナーレ」のアルセナーレにて展示される。

京都市立芸術大学
Kyoto City University of Arts

@KCUA

京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA
〒604-0052 京都市中京区押油小路町238-1
地下鉄「二条城前」駅（2番出口）南東へ徒歩約3分
「堀川御池」バス停下車すぐ
TEL: 075-253-1509
http://gallery.kcua.ac.jp

編集：西谷枝里子（リレーリレー）、藤田瑞穂、西尾咲子、永田絵里
デザイン：仲村健太郎
発行：2019年3月25日
© 2019 京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA